【修猷館校内見学ツアー記】

■ 学食試食

今年の校内見学ツアーは、各委員会の皆さんと食堂に集合し、学食の試食からスタートしました。

今年はこれまでとは提供方法が変わり、幕の内弁当のように主菜や副菜、ご飯などが一つにまとめられたお弁当形式となっていました。ボリュームもしっかりあり、実際にいただいてみると味もよく、低価格でこの内容なら十分満足できる昼食だと感じました。

一方で、毎日利用する生徒の立場から考えると、もう少し選べる楽しさがあってもいいのかな、とも感じました。とはいえ、修猷館では家庭で作ったお弁当を持って登校する生徒が多く、学食を利用する人数にはどうしても限りがあります。利用者が限られる中でメニューを増やし、内容をさらに充実させていくことは、運営する側にとって簡単なことではないのでしょう。

毎朝のお弁当には、それぞれの家庭の思いや、日々のちょっとした会話まで含めた、家族のつながりのようなものが詰まっている気がします。この文化は、これからも大切に残ってほしいと思います。

その一方で、学食も生徒たちにとって大切な昼食の選択肢です。家庭のお弁当という良き文化を大切にしながら、学食もより多くの生徒に親しまれ、少しずつ充実していく。「お弁当か学食か」とどちらか一つを選ぶのではなく、それぞれの良さを残しながら、両方がうまく共存していける方法はないものか。学食で食事をしながら、そんなことを考えました。

■ 図書館見学

続いて向かったのは、菁莪記念館にある図書館です。

約 7 万冊の蔵書を有し、生徒たちの学習や知的活動を支えている図書館については、これまでの校内見学ツアーでも何度も紹介してきました。

今年、説明を聞いていて特に印象に残ったのは、本を借りるだけではない、もう一つの図書館の使われ方でした。

運動会が近づくこの時期になると、過去の運動会の資料や映像を見に来る生徒が多くいるそうです。

より良い演技をしたい。より良い応援をつくりたい。そして、自分たちの運動会を少しでも良いものにしたい。そのために先輩たちが残した過去の記録を探し、DVD などの映像資料まで見ながら研究していると伺いました。

この話には、いかにも修猷生らしいものを感じました。

貴重な蔵書

伝統とは、単に「昔から同じことを続けている」だけでは残っていかないのだと思います。先輩たちが残したものを後輩が自ら知ろうとし、そこから学び、自分たちなりにさらに良いものにしようとする。その積み重ねによって初めて、伝統は次の世代へ受け継がれていくのではないでしょうか。

本番を目前にして過去の映像まで真剣に研究する生徒がいると聞き、「やっぱりこの子たちは真面目だな」と感心すると同時に、修猷館の運動会に対する生徒たちの思いの強さを改めて感じました。

また、映像資料をより利用しやすくするため、現在の機器に合ったイヤホンやヘッドホンなど、PTA としてお手伝いできることがあれば提供してはどうか、という話にもなりました。

本を読む場所だけではなく、過去を知り、次の世代へつなぐ場所でもある。今年は、これまでとは少し違った図書館の姿を見ることができました。

蔵書検索/動画鑑賞ブース

■ 運動会練習見学

図書館を後にして、運動会本番を 2 日後に控えた練習を見学しました。

毎年見ている光景ではありますが、何度見ても圧倒されます。

とにかく声が大きい。そして動きが速い。移動するときも、練習するときも、一人ひとりがきびきびと動き、まだ練習の段階だというのに驚くほど真剣です。

昨年度の見学でも、各ブロックが大幹を中心に全員で走って移動し、「秒単位の時間も無駄にしない真剣さ」が印象的でした。今年もその姿は変わりません。

考えてみれば、先ほど図書館で聞いた「過去の運動会を研究する生徒たち」が、今度は目の前で自分たちの運動会をつくっているわけです。

本番だけを見れば華やかで迫力のある修猷館の運動会。しかし、その一日をつくっているのは、そのずっと前から積み重ねられてきたこうした練習です。

誰かに言われたから仕方なくやっているのではなく、自分たちでもっと良いものをつくろうと本気になっている。

その姿を間近で見ることができるのは、校内見学ツアーならではの貴重な経験だと思います。

■ 修猷資料館見学

最後に訪れたのは、修猷資料館です。

ここでは、江戸時代の藩校から現在の修猷館へと続く歴史について、展示を見ながら先生から丁寧に説明していただきました。

昨年度の報告書でも、藩校時代から現在までの歩みや、孔子聖像、東京オリンピックの五輪旗などが紹介されています。

実際に説明を聞きながら館内を見て回ると、単に「古い学校だ」というだけではなく、その長い歴史の中で大切にされてきた考え方や伝統が、今の学校にもつながっていることを強く感じます。

特に印象に残ったのは、説明の要所要所で、日本の歩みを支えてきた人物たちの名前が次々と出てきたことでした。

「この人物がここで学んだ」「この人物が教えた」といった話を聞くたびに、修猷館の歴史が学校の中だけで完結しているものではなく、日本の近代化や社会の発展ともさまざまな形でつながってきたことが伝わってきます。

創立 242 周年という長い歴史を持つ学校であることは知っていても、資料館で実際の展示を見ながら、その時代ごとの人物や出来事の話を聞いていくと、数字だけでは分からない歴史の重みを改めて感じました。

そしてもう一つ印象的だったのは、昔から受け継がれてきたものが、単に資料館の中に保存されているだけではないということです。

先ほど図書館で聞いた、運動会前に過去の資料や映像を見て、自分たちの演技や応援をより良いものにしようとする生徒たちの姿。さらに、その後の運動場で、大きな声を出しながら真剣に練習に取り組む生徒たちの姿。

そうした今の生徒たちの行動の中にも、先輩から後輩へ受け継がれてきた修猷館らしさが表れているように感じました。

長い歴史を守るということは、古い資料や建物を残すことだけではなく、その中で大切にされてきたものを次の世代が受け取り、自分たちの時代に合った形でさらに次へつないでいくことなのかもしれません。

資料館に名前を残す先人たちも、かつてはこの学校で学び、あるいはこの学校に関わった一人ひとりでした。

そう考えると、今、運動場で声を張り上げている生徒たちも、これからそれぞれの道へ進み、いつか社会の中で何かを築いていく存在になっていくのでしょう。

資料館を見学しながら、修猷館の歴史とは過去のものではなく、今この学校で学ぶ生徒たちによって、現在も続いているものなのだと感じました。

■ もう一つの「正門（東門）」

そして資料館を見学したあと、ぜひ目を向けていただきたい場所があります。

修猷館に合格した日、現在の正門の前で記念写真を撮ったというご家庭も多いのではないでしょうか。

実はそのすぐそばには、歴史ある旧正門（東門）が残されています。この旧正門は「福岡市登録文化財」にも登録されており、修猷館の長い歴史を今に伝える貴重なものです。

毎日何気なくその近くを通っていると、つい見過ごしてしまいそうですが、これから修猷館を目指すご家庭、そして来年度から新しく修猷生となるご家庭には、ぜひこの旧正門にも目を向けていただきたいと思います。

合格の日には現在の正門だけでなく、歴史ある旧正門の前でも、「これからここで 3 年間頑張ります」という気持ちで一枚。

そして 3 年後、卒業の日には、「3 年間ありがとうございました」という気持ちでもう一枚。

そんな写真を残すのも素敵なのではないでしょうか。

入学したときにはまだ新入生だった子どもたちも、やがてこの学校を巣立っていきます。

その 3 年間に何を学び、何に本気になり、どんな仲間と出会うのか。

長い歴史を見守ってきた旧正門（東門）の前で、入学と卒業の二枚の写真を残す。それもまた、一人の修猷生がこの学校で過ごした時間を残す、小さな「歴史」になるような気がします。

旧正門（東門）

■ そして 2 日後――運動会当日

校内見学ツアーから 2 日後、いよいよ運動会本番を迎えました。

例年、修猷館の運動会というと厳しい暑さの中で行われる印象がありますが、今年は曇り気味の空模様で比較的過ごしやすく、例年以上にじっくりと生徒たちの姿を見ることができました。

そして、やはり今年も圧倒されました。

あれだけ多くの生徒が大きな声を出し、走り、自分の持っている力の、まるで 120%まで絞り出そうとする。競技も、応援も、ダンスも、本当に全力です。

そんな今年の運動会では、強い風による思いがけないアクシデントもありました。

応援コンテストでは、強風の影響で予定していた演出が十分に展開できない場面がありました。しかし、そうした予期せぬ出来事の中でも、生徒たちは気持ちを切らすことなく、最後まで自分たちの演技をやり遂げました。

また、風による不可抗力のアクシデントについては、その後の運営生徒の判断により、演技の一部を改めて披露する機会も設けられました。

長い時間をかけて準備してきたからこそ、本番では思い通りにならないこともあります。それでも、その場で気持ちを切り替え、仲間とともに最後までやり抜く。そうした姿もまた、今年の運動会で印象に残った生徒たちの姿でした。

運動会は、すべてが予定通りに進むことだけに価値があるのではないのだと思います。思いがけない出来事に直面したとき、どう受け止め、どう次へ進むのか。そこにも、高校生活の中でしか得られない大切な経験があるように感じました。

今の時代、ともすれば、何かに夢中になることや、人前で声を張り上げて本気になることを、少し格好悪いと感じてしまうような空気もあるのかもしれません。

それでも修猷館では、本気になることを恥ずかしがらない。

仲間と一緒に声を出し、失敗することも恐れず、自分が出せる力の限界までやってみる。

昨年度の報告書には、「ダサいことを全力でやりきるのが修猷」という言葉が紹介されていました。

今年の運動会を見ていると、その言葉の意味が改めてよく分かるような気がしました。

極限まで頑張った人にしか分からない達成感や充実感がある。

勝った、負けたという結果以上に、高校時代にそれを経験できることには、大きな意味があるように思います。

図書館で先輩たちの記録を調べ、それを受け継ぎ、練習では仲間と声を張り上げ、本番では自分たちの持っているものをすべて出し切る。

そして今年の運動会もまた、新しい記録となって残り、いつか後輩たちがそれを見る日が来るのかもしれません。

そう考えると、今回の校内見学ツアーで見てきたものが、最後に一つにつながったような気がしました。

この学校が長い年月をかけて守ってきたもの。

先輩から後輩へ受け継がれてきたもの。

そして今、それを受け取り、自分たちなりの形で次へ渡そうとしている子どもたち。

いつの日か修猷館を卒業し、それぞれの世界へ旅立っていくときにも、ここで経験した「本気で何かに取り組んだ時間」と、その先にあった充実感を忘れずにいてほしい。

今年の校内見学と運動会を通して、改めてそんなことを感じました。